

中国の大学英語教育の実態

井上裕子*

English Education in Chinese Universities

Yuko Inoue *

Received October 29, 2001

1. はじめに

英語を公用語・共通語としないアジア諸国の中での日本人の英語力がしばしば話題となる。書店に並ぶ豊富な教材，教育現場での多くのネイティブ・スピーカーの採用，インターネットの普及，衛星放送の受信，手軽に行ける語学留学，英会話スクールから通訳養成機関に至るまで，これほど英語を習得する上で環境に恵まれた国はないだろう。

では，英語力のバロメーターとして用いられるTOEFLの平均点はどうか。1998年7月から1999年6月までの日本人の平均点は 残念ながらアジア圏では最下位グループに属し，中国および韓国から大きく引き離されている。日本人の平均点は501点。それに対し，韓国人の平均点は535点，中国人の平均点は562点という結果であった⁽¹⁾。

この十年間の変化については，1987年7月から1989年6月までの結果と1998年7月から1999年6月までの結果を比較すると，韓国人および中国人にはかなりの点の伸びが見られた。韓国人には30点の上昇，中国人には41点の上昇があった。それに対し日本人には僅か8点の上昇しか見られなかった⁽²⁾。

文部省（現文部科学技術省）が1989年度改訂学習指導要領に初めて「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を盛り込んでから10年以上が経過している。この間の日本人の英語力の伸びは前述の通りである。それに対し，中国の英語教育は大きな成果を上げている。なぜなのか。

今回，本学の中国英語教育視察に参加させてもらった⁽³⁾。本学が提携を結んでいる三大学での授業参観および英語教員との意見交換から，中国の大学英語教育の概要を捉えることができた。その英語教育はTOEFLの平均点の高さを十分に裏付けるものであった。

本稿では，現在の中国の大学英語教育の取り組みについて概要をまとめる。また，ページ数の制限上，視察報告書では割愛された部分も織り交ぜながら，日中の大学英語教育の違い，特に，北陸大学との違いについて考察する。

* 外国語学部
Faculty of Foreign Languages

2. 中国の大学進学率と大学入試制度

今回視察に参加した我々8名の英米語学科教員が共鳴したことの一つに、授業中の学生の積極的参加と高い学習意欲が挙げられる。教員の質問に対する学生の応答は非常に速く、指名されても沈黙する学生は誰一人いない。例えば会話の授業では、学生が主体となり活発にディスカッションが行われる。教員はグループ分けの指示を出し、学生同士の会話に対してコメントを述べる程度である⁽⁴⁾。その他の授業でも学生の自発的な発言が多く見られる。

こういった中国人学生の学習意欲の高さは、大学進学率に深く関係していると推測される。現在、中国の大学進学率は約6%⁽⁵⁾、それに対し日本の短大・大学進学率は49.1%⁽⁶⁾。日本では少子化が進み、定員割れに悩む短大・大学が急増している。大学も従来の選ぶ側から選ばれる側へと立場が逆転しつつある。魅力のない大学はその存続をも危ぶまれる時代に突入しているのである。こういった中、中央教育審議会は、国立・公立・私立大学のうちトップ30を世界最高水準に引き上げるべく重点投資の計画を立てる一方で、各大学がそれぞれ特色ある教育理念を打ち出し、教育研究における不断の改善を期待している⁽⁷⁾。学生の質が上部層に集中している中国の大学に対し、学生の質に大きなばらつきがあるのが日本の大学である。

中国の大学は次の5種類に分類できる。1) 国家教育委員会が直接設置・管轄する大学 2) 省・市・自治区が設置・運営する大学 3) 中央政府と地方政府が共同で建設・運営を行う大学⁽⁸⁾ 4) 中央官庁が設置・管轄する大学 5) 企業・社会団体・個人等が経営する民営大学。1992年以降日本の私立大学に相当するこの民営大学が急増しつつある(小島, 辻, 太田, 高橋, 1997)という。理由は、高等教育を受けたいという高まる大衆の要望にもかかわらず、1), 2), 3), 4) に分類される大学の門戸が狭いため、それを補うために政府は教育にも市場経済の原理を導入したのである(王曙光, 王智新, 他, 1998)。尚、民営大学を卒業しても学士号は得られない。学士号を取得するためには、1), 2), 3), 4) に属する大学へ進学し、規定の教育課程を修了し、かつ卒業論文の審査に合格しなければならない。

中国も我が国と同様に大学入試制度の改革が繰り返しなされている。2001年度に新入試制度が導入された。今回の改革の一つは、全国統一大学入学試験の受験資格者の年齢制限が撤廃されたことである。それまでは、普通高校を卒業した24歳までの受験生が対象であった。また、受験科目の検討期間でもある。2001年度は二つの方式がとられた。一つは「3+大総合+1」、もう一つが「3+小総合」である。

- 1) 3+大総合+1: 3(国語・数学・英語の3科目)+大総合(物理・化学・生物・政治・歴史・地理の総合)+1(物理・化学・生物・政治・歴史・地理の中から1科目選択)⁽⁹⁾
- 2) 3+小総合の文系: 3(国語・数学・外国語の3科目)+小総合(歴史・地理・政治)⁽¹⁰⁾
- 3+小総合の理系: 3(国語・数学・外国語の3科目)+小総合(物理・化学・生物)⁽¹⁰⁾

2001年度は、広東・河南・上海の三つの省・市で「3+大総合+1」の入試科目制度がとられ、他の省では「3+小総合」がとられた。2001年度から2002年度は「3+大総合+1」へ移行すべきかの検討期間にある。

また、各省(区・市)は大学入試の最低合格基準点を公表している。最低合格基準点は各省・自治区の教育庁が決定する。最低合格基準点は地域によりかなりのばらつきがある。2001年度の結果を見ると、北京では文系の最低合格基準を415点、理系の最低合格基準を445点とし

ているのに対し、海南では文系を330点、理系を300点としている。最低合格基準点はあくまで各省・自治区にある大学の最低合格ラインである。例えば、重点大学の一つである北京大学の合格点は北京教育庁が示す合格基準点よりはるかに高い。重点大学とは国がより力を入れている大学を指す。21世紀に向けて100の重点大学を強化しようとするプロジェクトが1992年に開始された（新保，1997）。

2001年度の大学入試受験者数は350万人、うち合格者数は210万人であった。文化大革命後から数年間、統一試験の競争倍率は10倍を超えていたが、近年は5倍前後に落ち着いている。これは、統一試験を受ける受験者層が絞り込まれているからである（天児，石原，朱，辻，菱田，村田，1999）。数字の上では厳しい受験戦争があるように見えないが、実際は存在する。それは受験生がよりレベルの高い大学を目指す傾向にあるからである。また、日本の予備校に当たるものは存在しない。受験に備え家庭教師を利用する場合もある。尚、受験に失敗した者は再度高等学校の教育を受けることになる。

3．共通テキスト

今回の視察で考えさせられたことの一つにテキストの選定がある。北陸大学では、1995年度～1998年度に1年生・2年生の英語演習Bのクラス（現行カリキュラムでは英作文に相当する）および英語演習A（現行のカリキュラムでは英文講読に相当する）の授業に共通テキストを取り入れた⁽¹¹⁾。導入のきっかけは、各担当教員が選んだテキストの違いからくる格差を削減することと学生の基礎英語力の向上であった。井上（1996）は、英作文のクラスで使用された共通テキストおよびそれに付随する統一テストやクイズに関するアンケート調査を学生と担当指導者の双方を対象に行った。その結果、7割以上の学生から有効性肯定の意見を得た。しかし、問題点も多い。例えば、指導者側からの意見として「授業との兼合いが難しい」「メインテキストがなかなか進まない」「統一テストの採点基準が曖昧」などがあつた。学生側からの意見として「詰め込み方式ですぐ忘れてしまう」「各先生によってクイズの形式・やり方等が違うので統一してほしい」「範囲が広すぎる」などがあつた。

中国では一部の外語系大学を除くほとんど全ての大学で共通のテキストが使用されている。これらのテキストは、上海外国語大学の教員によって編著されている。1980年に出版されて以来、定期的に改訂がなされている。テキストは全国英語統一試験（TEM）に合わせて編集されているばかりでなく、高等教育機関における英語専攻のカリキュラムを満たしたものとなっている。

精読用テキストとして使用されている‘A New English Course’を例に挙げよう。レベルは1～4までである。これらは1年生および2年生用として使われる。各レベルとも学生用テキスト・学生用ワークブック・指導者用マニュアル本・カセットテープの4点セットからなる。指導者用マニュアル本は学生も入手可能である。レベル1には1Aと1Bの2種類がある。入学時の学生のレベルに合わせて選べるようになっている。レベル1Aから始めればレベル4を終えるのに2年半かかる。レベル1Bから始めれば2年で済む。この5種類のテキストは言語能力と運用能力の双方を考慮にいれながら、しっかりした英語の基礎力を養成するように作られている。各レベルとも4技能を高めるよう工夫されているが、レベル1および2とレベル3お

よび4とでは多少色合いが違う。レベル1および2はリスニングとスピーキングを中心に基本文法事項の定着が図られている。一方、レベル3および4は読解とライティングにより重点が置かれている。

レベル1および2の各ユニットの構成は次の通り。

- (1) Language Structures
- (2) Dialogues
- (3) Dialogues
- (4) Reading
- (5) Reading
- (6) Guided Writing
- (7) Interaction Activities

Language Structuresでは基本構文が1～4例挙げられている。それをもとに様々な口頭での練習問題が準備されている。Dialogues は各ユニットで扱う構文とトピックに合わせた内容の対話文であり、Dialogues は言語機能を中心とする対話文である。Readingのパートは
 ・ から構成されている。本文は予習する必要はない。本文を読んだ後、教師から内容に関する口頭質問がある。Guided Writingでは語句の穴埋めや、文章の並べ替え、パラグラフライティング、簡単な手紙の作成などが盛り込まれている。Interaction Activitiesではユニットで学んだ言語材料を利用して、より自然な英語が発話できるよう工夫を凝らした課題が準備されている。

レベル3および4の各ユニットの構成は次の通り。

- (1) Text
- (2) Text
- (3) Oral Work
- (4) Guided Writing
- (5) Listening Comprehension

Text では次の手順が踏まれている。

- (1) タイトルからの内容推測
- (2) スキミングによるメインアイデアの把握
- (3) 語彙
 - a . 語彙の推測 (語彙と定義のマッチング作業)
 - b . 英英辞書を活用 (テクストに合った定義を探す作業)
- (4) 解説 (語彙・表現の解説および活用方法の紹介)
- (5) 内容に関する質問 (口頭)
- (6) 作家の技術についての批評

Text はText の補助的読み物として扱われているためText ほど丁寧に読み込む必要

はない。Oral WorkはText ・ に関連した活動内容となっている。Guided Writingには大意要約・パラグラフライティングや作文・手紙作成などの作業が盛り込まれている。Listening Comprehensionにはスペリング、ディクテーション、内容に関する質問、穴埋め問題、中国語から英語への翻訳、文章の書き換えなどがある。

以上のように、中国で使われている英語のテキストは言語能力および運用能力のバランスを取りながら体系的にまとめられている。

日本にはおびただしい数のテキストが販売されている。しかし、これほど体系的にまとめられ、しかも英語の定着を図るために様々な工夫がなされているテキストはあるだろうか。北陸大学では、テキストの選定は各担当教員の裁量に任されている。そのため、結果として雑然と寄せ集めたテキストが並ぶ傾向が強い。林(2001)が指摘するように、学年で使用するテキストの難易度が逆転する場合も起こりうる。このテキストを使用すれば、1年間でこれだけの言語能力・運用能力が図れるといった設定が必要であろう。テキストの縦と横の連結を密接にする上でも、テキスト選定は我々教員にとって重要課題と言える。

4. 全国英語統一試験

中国には全国英語統一試験(TEM)が1992年度より実施されている。この試験は1級から8級まであり、英語専攻の2年生と4年生にはそれぞれ4級と8級の受験が課せられる。8級は日本の英検1級或いはそれを上回る難しさであるが、就職には有利ということで各大学とも高い合格率を出している。因みに8級合格は卒業要件ではない。しかし我々が視察した三大学の近年の合格率は75%~100%と非常に高いものであった。

TEMは記述式と選択式からなる。問題形式は次の通り。

4級 全所要時間 145分

Part 1	Writing	[45 minutes]
	Section A: Composition (150 words)	
	Section B: Note-Taking (50 - 60 words)	
Part 2	Dictation	[15 minutes]
Part 3	Listening Comprehension	[20 minutes]
	Section A: Statement	
	Section B: Conversation	
	Section C: News Broadcast	
Part 4	Close	[15 minutes]
Part 5	Grammar & Vocabulary	[20 minutes]

- Part 6 Reading Comprehension [30 minutes]
 Section A: Reading Comprehension
 Text A ~ Text D (4 different texts)
 Section B: Skimming & Scanning
 Text E ~ Text J (6 different texts)

8級 全所要時間 215分

Paper 1 [95 minutes] + Paper 2 [120 minutes] = 215 minutes

Paper 1

- Part 1 Listening Comprehension [40 minutes]
 Section A: Talk
 Section B: Interview
 Section C: News Broadcast
 Section D: Note-Taking & Gap Filling

- Part 2 Proofreading & Error Correction [15 minutes]

- Part 3 Reading Comprehension [40 minutes]
 Section A: Reading Comprehension
 Text A ~ Text D (4 different texts)
 Section B: Skimming & Scanning
 Text F ~ Text J (6 different texts)

Paper 2

- Part 4 Translation [60 minutes]
 Section A: Chinese to English
 Section B: English to Chinese

- Part 5 Writing (300 words) [60 minutes]

尚、スピーキングのテストはLLを使用。受験者は与えられたトピックについて時間内に英語で話す。テープ録音されたスピーチが審査される。

TEMには次のような特色が挙げられる

- 1) 4技能が徹底的に測られる
- 2) 問題量が非常に多い
- 3) 速読が要求される
- 4) skimmingとscanningの両方が要求される
- 5) 他の英語の試験(例: TOEIC, TOEFL, 英検)に十分耐えうる

4級

- ・レベルは英検準1級に近い
- ・ライティングはTOEFLのTWEに近い
- ・Grammar & Vocabularyの問題は英検に類似している

8級

- ・レベルは英検1級或いはそれ以上
- ・Proofreading & Error Correctionに高度な英語力が要求される

大連外国語学院の教員との意見交換の場で、「TEMの導入が中国の学生の英語力の向上につながったか」という質問に対して、「特に変化はない。目標がないよりもあった方が励みになる」という回答だった。

5. 教員の協力体制

岡部(2000)は、ALT(外国語指導助手)の導入が日本の中学校・高等学校の英語教育に大きな変革をもたらしたと指摘している。確かに、教師が授業に使用する英語の割合は増えただろう。また、生徒が生徒の英語に触れ、ALTを通して異文化を理解する場面も増えただろう。実際に生徒が意欲的にコミュニケーション活動に取り組むようになったという教師の声も聞く。更に、英語教師のALTに対する依存度も高い。肥沼(1996)は、LLの授業とALTの必要性について、LL設置校(49校)と未設置校(59校)の中学校にアンケートを行った。その結果LLもALTも必要であると回答した学校は、それぞれ87.2%と72.9%という高い数値を示した。LL設置校の中には、「ALTがいればLLは必要ない」と回答した学校が5.0%を占め、LL未設置校においては11.9%も占めていた。

では、ALTの投入後、生徒の英語力はどれほど向上しているのか。筆者はALTの投入は、教員同士の協力体制を促せたという点で変革をもたらしたと考える。それまで1人の教員が進めてきた授業を複数の教員(通常、JET1名とALT1名の2名)が取り組むことで、1人の教員では見えなかった問題点が見えるようになり、1人の教員では思いつかなかったアイデアが思いつくようになる。それが、チーム・ティーチングがもたらした変革ではないかと思う。よって、チーム・ティーチングの相手がALTの場合に限られたことではなく、日本人同士の教員が行う場合も同様に協力体制が必要となる。

田崎(2000)は、日本人が中学校から大学までの10年間に平易な会話力を身につけることを難しくしている原因が、「学習指導要領」と日本の入試制度にあると主張している。教師と生徒がこの二つのワケに縛られているため、ALTの投入も単なる「ジェスチャー」としか受け取られないと述べている。これらが日本人の会話力の伸びを抑制している主な原因なのであろうか。

今回視察した中国の英語教育現場はどうか。中国では、ネイティブ・スピーカーの依存度は極めて低い。訪問した3大学の中では、上海外国語大学にカナダ出身のネイティブ・スピーカーが1人いただけである。しかも、彼女の場合、一年間の交換教員ということだった。また、

中国人英語教員の中で留学経験を持つ者は非常に少ない。それでも、彼らは立派に英語で授業をこなしている。それでは、どこに中国の英語教育の成果の秘訣があるのか。

その一つに、教員同士の縦と横の密接な協力体制にあると言える。視察報告書でも述べたように、日本の英語教育現場では教員による個人プレーのケースが多い。中学校・高校においては、学習指導要領があるため、使用テキスト等においては統一がなされているが、大学においては「お任せ主義」の傾向が強い。つまり、テキストの選択から試験問題に至るまで担当教員の裁量に任せている場合が多いのである。その結果、同じ科目でも、担当教員により指導内容にかなりのばらつきが出てくる。

大谷（2000）は、日本の大学英語教育がおかれた状況に対して、教員の危機意識があまりにも希薄であることを懸念している。個々の教師の授業改善も大切なことであるが、何よりも系統立てたカリキュラムと教員のチームワークが大きな教育効果をもたらすという発見が、今回の中国視察の大きな収穫であった。日本の大学英語が抱える問題は、「木を見て森を見ず」に進んできたことにあるのではないかと思う。学生の英語力を向上させたいと真剣に願うならば、時代の趨勢・学生の気質や学力に合ったカリキュラムや授業方法へと我々教員が一致団結して調整しなければならない。

中国の大学では、縦軸（学年別）と横軸（科目別）に教員の協力体制が敷かれている。同じ科目を担当する教員が、学年別に結集し教育効果を図っているのである。また、縦軸の連携も怠らない。具体的には、横軸を中心に定期試験問題や成績評価の統一を図っている。ライティングのクラスを例に挙げると、担当教員間で定期的にワークショップを開いたり、学生が書いた課題の中から良いものを選び、クラスの枠を超えて授業で紹介したりと常に授業の活性化を図っている。授業外の課題も各担当者グループが統一課題を出している。

また、中国では一人の教員が担当する科目の種類は極めて僅かである。例えば、大連外国語学院では2年生のintensive readingを担当する教員、3年生のcomprehensive readingを担当する教員といった具合に、一人の教員が同じ科目を集中的に教える体制を取っている。因みに、intensive readingのクラスは週に3回組み込まれている。一方、北陸大学の英米語学科の日本人教員の場合、一人の教員が担当する科目数は少なくとも4種類以上ある⁽¹²⁾。現行のカリキュラムでは一人の教員が1科目だけを担当するということは困難である。その他の理由として、学生にはいろいろな教員の指導を受けさせた方が良いという考えに基づいている。

しかし、担当科目の種類が多いということはそれだけ教員が個々の科目にかかる教材研究の時間も長くなるということである。「同じ科目を教えることは新鮮味に欠ける」と主張する教員もいるだろうが、これは教育の効率化に結びつく。よりきめ細かな教材研究を追求できるばかりでなく、横並びのクラスの比較も可能となる。高安（2001）は、講義・会議・大学運営や学生指導に関するあらゆる雑用が降りかかっている日本の大学教員の現状を鑑み、余裕のない大学が学生に何を教えられるかという疑問を投げかけ、将来に憂いを抱いている。こういった点からも、英語専門科目、特に訓練科目の効率化についての議論の余地はあるはずだ。

6. 授業での使用言語

中国では英語の授業の90%~100%が英語で行われる。それは英語の訓練科目だけでなく、講義科目も含む。これは、日本の学習指導要領に相当する「教学大綱」が「中学～大学レベルでは授業中できるだけ英語を使うこと」といった緻密な指示を課している（末延，2000）が、現場の大学教員は「伝統的になされていること」として捉えており、英語中心による授業は自然のこととして受け止めているようである。

また、英語専門科目以外の授業も英語で行われている。例えば、自然科学専攻の学生を対象にした専門科目の授業でも英語が使用される。大学入学時から1年間英語を履修させ、2年目からは英語による専門科目の授業を行っている大学もある（Pride and Lin, 1988）。医学部や看護学校では英語が必修科目となっている。医療技術の最新情報を得るには英語が重要であるという考えがその根底にある。その他の理由として、現場での昇進基準に採り入れられているばかりでなく、患者の前では看護婦と医師は英語で会話をしなければならないという義務付けがあるからである（Yong and Campbell, 1995）。

7. 授業風景

ここで実際の授業風景を紹介する。

日 時 : 2001年9月11日 8:00 - 9:30 a.m. (90mins) 授業は第2週目
 クラス : 2年生 Intensive Reading
 学生数 : 44名（うち約8割は女子学生）
 使用テキスト : Level 3 A New English Course（上海外語教育出版社）
 本 時 : Unit 2 第1時
 使用言語 : 約9割は英語
 教 員 : 30代前半女性（大学教員歴8年 - 大連外国語学院卒業生）

8:00 - 8:07 - oral report -

2人の学生に発表させる。発表内容は自由。最終的には全員が発表。
 各学生の発表後、2～3人の学生に内容について質問させる。
 教員は発表者の英語表現の間違いを一部訂正

8:07 - 8:25 - Comprehensive Exercises -

1) スペリング

教員が読み上げる単語を書き取る

全12問 occasion, routine, joyously, measles, murmur, dismissive, inflamed, hostile, reasonably, brutal, grateful, claim（これらはディクテーションに出てくる単語）

2) ディクテーション(220 words程度のストーリー)
 最初はストーリー全体を聞かせる(カセットテープの使用無し)
 次に本文を書き取らせる
 もう一度ストーリー全体を聞かせる
 5~6名のノートを回収

8:25 - 8:35 - Text 1 の導入 -

テキストは伏せたまま
 タイトルについて2~3人の学生に質問
 prereading questions
 例: Is going on holiday generally a pleasant or a painful experience?
 Who might be going on holiday?
 Where might the person be going on holiday?

8:35 - 9:25 - 本文の確認 -

学生に本文の一部読ませる
 トピックセンテンスを見つけさせる
 キーワードの意味を確認させる。その際、必ず応用表現を作らせ紹介する
 中国語を英語で表現させたり、英語を中国語で言わせたりする
 例: to face the problem--to face financial penalty

9:25 - 9:30

本文の新しい表現の確認
 学生はテキストを閉じる
 書き取り23問
 例: pleasurable vacation, tread doing something, to go on holiday
 数人の学生のノートを回収

授業終了

感想

精読のクラスだが授業の始めにスピーチをさせたり、ディクテーションをさせたりと、常に学生の4技能を駆使させる工夫が伺えた。また、本文に出てきた1つの表現から5~6つもの応用表現へと膨らませるよう心がけているようだった。幾度となく“Any other explanation?” “What’s your understanding?”という質問が学生に投げかけられていた。中国語の使用は英語を中国語に、中国語を英語に訳させたりする場合のみであった。授業の残り5分間を利用し

て、その日の重要表現を書き取らせることは良いアイデアだと思った。また、テキストを伏せさせたまま内容に関する質問に答えさせる作業は、学生のいい加減な読み方を防ぐ上で効果的であると思った。教員は常にfacilitatorの役に徹していた。

8. まとめ

中国の大学教育は次の3本柱から成り立っている。一つ目は妥協しない徹底した教育方針、二つ目は教員同士・使用教材の縦と横の密接な繋がり、三つ目が学生の高い学習意欲である。このバランスのとれた3本の柱が中国の英語教育のレベルを上位に押し上げている。3本の柱のうちどれか1本でも揺らいでいるとその教育効果は減じることは言うまでもない。日本の大学英育の現状はどうであろうか。この3本柱全部がしっかり支えあっているだろうか。柱1本、1本を見直す必要があるのではないか。

また、「英語圏へ留学すれば確実に英語が身につく」と考える日本人は多い。確かに、ESLの環境の方がメリットは大きい。生の英語に触れる機会はESLの方が圧倒的に多い。また、異文化も体験できる。しかし、EFLの環境でも4年間で十分に高度な語学力を養成できるということを中国の大学は我々に証明している。

謝 辞

本学の視察団を快く受け入れ、授業参観や懇談会の機会を与えて下さった、大連外国語学院、上海外国語大学、蘇州大学の関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。また、中国の大学入試制度および高等教育についての最新情報を収集するにあたって、蘇州大学の陸恵星さん、本学外国語学部英米語学科に在籍の屈莉さん（中国出身）には多大な協力を戴きましたこと、深く感謝します。

註

- (1) 朝日新聞2000年1月26日朝刊参照。
- (2) TEST and Score Manual 1990-1991 Edition
- (3) 平成13年9月10日から9月17日にかけて、本学と提携を結んでいる大連外国語学院、上海外国語大学、蘇州大学を訪問。中国の大学英語教育の視察を目的に8名の英米語学科教員が参加。
- (4) 「中国英語教育視察報告書」内マチュエット教授による授業参観参照。
- (5) 2001年度の入試結果より。尚、この進学率は民営大学へ進む学生も含まれる。
- (6) 平成12年度我が国の文教施策参照。進学率49.1%は平成12年度の結果。大学（学部）への進学率（浪人を含む）は39.7%であった。
- (7) 文部科学省（<http://www.mext.go.jp/>）の「21世紀教育新生プラン・大学の構造改革」参照。
- (8) 例えば、1997年に国家教育委員会と北京市が、北京大学清華大学・人民大学・北京師範大学の4校を共同建設する協定を結んだ（「中国総覧1999年度版」霞山会参照）。
- (9) 国語・数学・英語は各150点の計450点、大総合は6科目まとめて150点、選択科目は150点の計750点満点となる。尚、選択科目は各大学が独自に行う。
- (10) 国語・数学・外国語は各150点の計450点、小総合は3科目まとめて300点、計750点満点となる。
- (11) 英作文では「ロングマン エルドス2000 活用英単語 第4刷」（桐原書店）を、英文講読では「TOEICボキャブラリー基本編」「TOEICボキャブラリー応用編」（アルク）を取り入れた。
- (12) 卒業研究、ゼミナールおよび講義科目を含む。

参考文献

- A New English Course 1 - Teacher's Book (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 1 - Student's Book (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 1 - Workbook (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 2 - Teacher's Book (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 2 - Student's Book (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 2 - Workbook (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 3 - Teacher's Book (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 3 - Student's Book (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 3 - Workbook (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 4 - Teacher's Book (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 4 - Student's Book (1999) 上海外語教育出版社
 A New English Course 4 - Workbook (1999) 上海外語教育出版社
 Simulated Tests for English Majors - Grade 4 2001~2002 中国人口出版社
 Simulated Tests for English Majors - Grade 8 2001~2002 中国人口出版社
 井上裕子 (1996) 「英語基本用語集の活用と取り組みの実態」『北陸大学紀要』第20号 pp.201-212 北陸大学
 大谷泰照 (2000) 「大学英語教育の行方」『英語教育』第49巻2号 pp.10-11 大修館書店
 王曙光・王智新・朱建栄・熊立雲 編 (1998) 『最新教科書 現代中国』柏書房株式会社
 岡部幸枝 (2000) 「英語教育改革は教員養成から」『英語教育』第49巻2号 pp.12-13 大修館書店
 肥沼則明 (1996) 「生徒が主体的に取り組むこれからのLL授業のあり方 コミュニケーション能力を高めるLLとティーム・ティーチングの融合した授業」STEP BULLETIN Vol.8 pp.39-54 日本英語検定協会
 小島晋治・辻康吾・太田勝洪・高橋満 編著 (1997) 『中国百科』大修館書店
 末延岑生 (2000) 「アジアの英語事情 - 中国の場合」『英語教育』第49巻9号 pp.42-43 大修館書店
 高安秀樹 (2001) 「大学の危機」10月19日付け朝日新聞
 田崎清忠 (2000) 「日本人にとっての『英語力』を見極めよ」『英語教育』第49巻2号 pp.18-19 大修館書店
 天児慧・石原享一・朱建栄・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎 編 (1999) 『現代中国事典』岩波書店
 林正人 (2001) 「中国英語教育視察感想」『中国英語教育視察報告書』北陸大学外国語学部 pp.19-20
 Pride, John B. and Liu Ru-shan (1988) Some Aspects of the Spread of English in China since 1949. International Journal of the Sociology of Language, 74, pp.41-70
 Yong, Zhao and Campbell, K. P. (1995) English in China, World Englishes, Vol.14 No.3 pp.377-390